

白隠のもうひとつの自伝 『八重葎』巻之三「幼稚物語」

ノーマン・ワデル

白隠慧鶴禅師(1685-1768)の膨大な著作の大きな特色の一つは、その自伝的なところにある。それが一番まとまったかたちで現れているのは、晩年の『八重葎』(やえむぐら)と『壁生草』(いつまでぐさ)の二つの自伝である。本論文は『八重葎』についての序論と、禅師の貴重な伝記資料である巻之三「策進幼稚物語」の英訳・注釈である。

『八重葎』全巻を通じて、白隠の意図はいわゆる「悟後の修行」にある。つまり、学人が一旦の悟りに満足しないで、更に無限の「悟後の修行」(「上求菩提、下化衆生」の実践)を行持していくことが、禅師の強調したいところである。

『八重葎』巻之一「高塚四娘孝記」(1759)は、両親に死なれた遠州高塚の四人姉妹が、両親の菩提をとむらうために、三年かかって法華経の仮名写経をなしたとげた断を聞いて感心した白隠が、その物語と法華経の功德を説くためにまとめたものである。

巻之二「延命十句経靈驗記」(1759)では、色々な短編逸話や故事を並べて、観音経や延命十句経の靈驗功德を教えるといった内容である。

巻之三は「策進幼稚物語」と「高山勇吉物語」(1761)の二つの物語からなる。「高山勇吉物語」では、勇吉という少年が神がかりになり、白隠のような説法をし、修道の心得や白隠の公案禅の正当性を語る、という断などである。「幼稚物語」は、白隠の自伝の一つで、出家するまでの経過、それから若い修行時代、24歳の大悟・正受老人の許での修行まで、さまざまな記述を語ることからなるものである。